

### 〈あこのころの「誌要」〉栄光の『日本文学誌要』

天野, 紀代子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

100

(開始ページ / Start Page)

10

(終了ページ / End Page)

12

(発行年 / Year)

2019-07-27

## 栄光の『日本文学誌要』

天野 紀代子

私にとつての『日本文学誌要』は、輝かしい存在でした。それは、復刊第二号（一九五九年三月）の益田勝実の論文「桐壺の院」の掲載誌だからです。

他大学でも、学会誌にしては独特の表紙の『日本文学誌要』が届くと、あつ益田論文が載っているかな、と受け止められていた時期があつたようです。鈴木日出男さんは、この表紙には特別な思い入れがあつた、と後に言つておられました。

とは言え、こうしたことは後に知ることです、私は一九五九年四月に日本文学科に入学しましたから、復刊第一号（一九五七年十二月）も第二号も既刊のはずですが、リアルタイムの体験ではありません。入学すると国文学会員になり、その機関誌が『日本文学誌要』であることにも無知で、後に知ったことです。特に戦前の『国文学誌要』の時代の栄光は、三年生になって「益田ゼミ」に属するように

なつてから学びました。

戦時中の暗い時代も、対決の姿勢で学問の孤灯を守りぬいたという『国文学誌要』は、近藤忠義の『日本文学原論』とともに語り継がれていました。それは、一大学の学会誌に留まらず、広く影響力をもっていたということです。休刊を余儀なくされて、約二十年後に復刊の運びとなつた新しい体制のもと、旧「誌要」による学風の確立を支柱とした学問的伝統を発展的に受け継いでいこう、と「復刊のことば」には書かれています。そうした気概をもつた「誌要」再スタートの時代に、勉強を始めたばかりの一学生にとつては、『日本文学誌要』は雲の上の存在でした。

益田勝実先生は定時制高校が本務で、法政へは一九五五年から非常勤で兼務するようになりましたので、「桐壺の院」を提出したのでしょうか。第四号には「初期万葉の創造主体」を掲載していますが、専任になる（一九六六年四月）まではこの二本です。夥しい数の論文は外に発表して、ゼミ生たちはそれを追っかけていました。

その頃の卒業論文は各ゼミから一人ずつ選ばれて、四月ごろ「卒業論文発表会」が催されてきました。新四年生を集めて聞かせるもので、私もそこで口頭発表しましたが、学部の卒論を『誌要』に掲載するなどということは考えられない時代でした。そんなレベルではなかった、ということでしょう。一九六三年発行の第八号に博士課程在学の二人の名がありますから、その頃から優れた論文があれ

ば、学生のもので発表していくという機運になってきたのだと思われれます。

ここからは、自分史の上での『日本文学誌要』との関わりを書くしかありませんが、それはまだまだ遠い存在でした。大学院の修士二年生の時に結婚してしまい、益田先生からは「十年、巢籠もりしてこい！」と放り出された関係上、その後に書いた修士論文も、三十枚にして『誌要』に出すようにとは言われましたが発表する機会をふいにしました。博士課程に進むなどという選択肢はありませんでした。もっとも益田先生は、専任の二十余年間に博士課程に学生を採ったのは一人だけでしたから、受けても通らなかつたと思います。

巢籠もりしていたわけではありませんが、六、七年経ったころ大学院に聴講生として潜り込みました。その教室で提出したレポート「源氏物語の技法―作者のからめきたる素養から―」が、そのまま岩波の雑誌『文学』に持って行かれ、掲載されました（一九七八年七月号）。これが、初めての活字化です。修士論文から十年が経っていました。それでもまだ『誌要』とは無縁でしたが、初めて真面目に向き合ったのは、二四号（一九八一年二月発行）の時です。その頃は『誌要』が出ると合評会が持たれ、学科主任の西田勝先生から非常勤講師にも召集がかかりました。私は『源氏物語』のゼミ一つを持たされた新米講師でしたから、その号は精読して合評会に臨みました。中国文学の安藤信廣

さんの論文「羈旅する詩人たち―『万葉集』と六朝文学と―」の批評を、緊張をもって言われたことを憶えています。この合評会の催しは、その後どうなったのでしょうか。

次の論文「交友の方法―沈淪・流謫の男同志―」も『文学』に掲載され（一九八二年八月号）、何とか研究者の卵になることは出来ましたが、益田先生には「ホームランを打て」と言われ、空振りはもとよりケチな安打では突き返されました。なかなかホームランなど打てず、『誌要』への論文査読も、非常勤の間はずっと五十歳近くまで続ききました。それは幸せなことだった、と後になっては思います。益田先生にとつて『誌要』は、格の高い学術誌という認識だつたのだと思います。

初めて『誌要』に掲載してもらつたのは、一九八六年になって『源氏物語』の四季―六条院造宮と障屏画の方法―（三五号）でした。専任になってからの最初は「讓渡のモチーフ」（四四号 一九九一年三月）で、定年後の一昨年「宇治十帖を導いた「嵯峨の隠君子」伝承」（九六号 二〇一七年七月）まで八、九本だと思えます。過去の栄光からはだいぶ離れた存在になっていましたが、私にとつて『誌要』は大切な発表の場でした。

一つ「誌要」という表題について触れたいと思います。これは戦前から使われていましたが、完成された論文というより「研究ノート」的な「小論考」を意味するこの名を、かつて不足とする意見が出たことがあつたからです。学内

誌を越えて対外的にも影響力をもつような論文集に成長したのだから名を変えては、という意見でした。私はそれには反対で、質の高い「小論考」を提出して世に問う機関誌として最適な表題だと思います。またここで「桐壺の院」を持ち出しますが、この論文の肝心なところは『誌要』で出されていますが、それに『国文学解釈と鑑賞』など二つの論考を加えて「日知りの裔の物語―『源氏物語』の発端の構造」（『火山列島の思想』）が完成されたのです。この画期的な論文が最初『誌要』に発表されたことは、この機関誌の名に相応しい喜ぶべきことでした。

今回、復刊から百号まで続いた『日本文学誌要』記念号に、表紙のデザインも表題も変えずにこの先も発行され続けてほしい願いを込めて、栄光とは程遠い私的なことまで書かせていただきました。

（あまの きよこ・元本学教授）